



名古屋柳城短期大学

ちやべるにゆーす

第13号

2007年7月20日



死に様は生き様を映す、と言われる。すなわち、どのように生きたかが死ぬときに分かるということ。なんと恐ろしいことか！と思う。要するに「よく生きる」という言葉があるように、よく生きた人は、いい死に方をするという事ではないだろうか。

ここ何年か、一年生対象の「保育基礎演習」で、本学の歴史を学ぶ時間が設定されている。私はそこで、歴史の話とともに、本学の卒業生の一人を紹介している。その方は、鳥居なつさん。1899（明治32）年生まれ、2003年に104歳になろうとする年に亡くなられた。私は、なつさんがちょうど100歳になられたとき、大阪四条畷市にある老人ホームにお訪ねした。なつさんは、ご自分で書いた100年間の履歴をコピーして待っていてくださった。これには驚いた。そして、「何が聞きたいですか？」と尋ねられことを思い出す。一人の方の100年の人生をお伺いすること自体、恐れ多いことであつたと今あらためて思う。

なつさんは、そのすぐ後、推薦されてNHKの欽ちゃんの100歳バンザイの番組に出演された。学生さんには、このVTRを見てもらっているが、とても100歳には見えない。学生さんたちは、この番組と私の話から、なつさんが80歳まで現役で保育の仕事に携わっておられたこと、そして、ホームでの礼拝でオルガンを弾き、隣の特別養護老人ホームで毎日ボランティアをし、訪れる人々に手造りのお土産を渡し、「子ども大好き！」と明快に応えられているその姿に驚嘆し、そこに保育者としての理想の姿を見出すようだ。感想文を読んでいて、なつさんの最後のことが聞きたくなり、ホームに問い合わせをした。何人か電話を代わり、ようやくなつさんの最後の何年間を見てこられた

職員の方が出てくださった。少しお話を伺い、ホームの40周年記念誌を送っていただくことになった。その方は、自分の出会った最も印象的な方として、なつさんのことを「軽やかな達人」と題し一文を寄せられている。少女の頃、福井や台湾で大地震が起り、「一番大切な物を被災者に送らしましょう！」との学校の先生の言葉を実行し、日曜学校（教会）で毎週もらい大切に集めていた色とりどりのカードをノートに貼ったものを送ったことがあること、その精神はホームにおいても変わることはなかったと書かれている。「お客様がおいでになるといっては、リボンで金魚を作り、少しでも面白いもの、珍しいものが手に入ると、お弱い方のところに持って行っておられた。物でも親切でも、与えられることに抵抗を覚える方もおられるものだが、そんな方でもT様の親切には素直に喜んでおられた。実にここがT様の達人たる所以なのだ。入り込みすぎず、押し付けがましくなく、サラリと

生きることと死ぬこと

尾上 明子

しているようで、実に細やかな神経を遣いながら相手を尊重しておられる。…」（『支えられつつ支えて』社会福祉法人うるうてるホーム、2005年）と。そして、なつさんの最後、胸苦しさを訴えられて救急車で運ばれていくとき、「あなたたちが困るから」と言って、ご自分の食事の内容と量を記したものを用意されていたこと、救急車の窓からなんと楽しそうに手を振っておられたこと、「大したことがないから」とおっしゃりたかったのかと。軽やかな風のような印象を与えて続け、大好きな神さまのところへ行かれたなつさん！よく生きることは難しい！とつくづく思う。けれども、こんな素敵な人生の先輩にほんの少しでも近づけたらと心から思う。

水曜日の礼拝から

毎週水曜日の礼拝では、いろいろな方に講話をお願いしています。本号では、前期の礼拝の中からお二人のお話をご紹介します。

5月16日



後藤 香織 司祭

(中部教区司祭・教区「性的少数者プロジェクト」担当者)

(聖書朗読:ガラテヤの信徒への手紙3:26-28)

先ほど読んでいただきました

ました聖書。ガラテヤの信徒の手紙3章28節の「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません」という箇所を聞いて皆さんは、どういう受け取り方をされたでしょうか？

男でも女でも、性別に関係なく平等なのだということを言っているのだな、なるほどと思われた人もいらっしゃるでしょう。また反対に、男と女は違うのに、そんな安易に“男も女もない”とは、ちょっとおかしいと思われた人もいらっしゃるかもしれません。

この箇所は、女性差別を解消する聖書の箇所として読まれたこともあり、最近では男女の性差をあまりにも簡単に解消しており、注意が必要とも言われています。いずれにしても、幾つかの受け取り方がありますが、本来は、わたしたちは人種や性別、生まれ育った環境や習慣など、いろいろな違いはあるけれども、神様の愛の中で一つにされている。言い換えますと、どんな人でも神様に愛されているということでは、一つなのだということを教えている聖書の箇所です。

ですが、今日はこの箇所を、この人はユダヤ人だ、ギリシア人だとか、この人は「女だ」「男だ」というような、先入観に凝り固まって人と接することの危険性を、わたしたちに教えてくれる聖書の言葉として、皆さんと共有したいと思います。

具体的にどうということか、わたしのことを

お話したいと思います。

皆さんの目に、わたしは女に映るのでしょうか。それとも、男に映るのでしょうか。実はわたしは性同一性障がいです。生まれたときの性別は男ですが、今は女として生活しています。

わたしを男だった時から知っている人の多くは、わたしがスカートを履いていても男にしか思えない、到底女になんか思えないと言います。反対に、わたしが女になってから出会った人は、わたしが男だったということを想像するのが難しいと言います。大変不思議なことなのですが、わたしと出会った時期によって、第一印象のせいなのでしょうが、わたしに対するイメージが全く異なるのです。

わたしを男という先入観でみる方々は、その視点からわたしを理解し、判断します。ですから、わたしを男と思う人は、わたしが女性と親しくしていると、「けしからん」と思うのです。反対に、わたしを女という先入観で見て、そこから理解、判断する人は、反対に、わたしが男性と二人で食事をしていたりすると「結婚しているのに、なんでしょ」と思うそうです。

同じ人間の同じ行動が、見る人によって180度判断が反対になる。わたしのような状況は特別ですが、それでもわたしたちは経験上、外見、年齢や性別、出身地や職業等々からある程度の先入観をもって、新しく出会った人との人間関係をつくって行きます。それは、出会う人の数を考えると、必要なことで、全く見当違いの判断ではないのでしょうか。

しかし、皆さんがこれから出て行かれる、保育や福祉の場においては、この先入観がわたしのような特別な状況でなくても、マイナスに働いてしまう危険性を頭の隅においていただきたいと思うのです。「女性だからこう」「男の子だからこう」という先入観による一面的な判断で、人との出会いを終わらせてしまうのではなく、“ユダヤ人もギリシア人もなく、男も女もなく”目の前の一人の人と真摯に向き合う中で、人との出会いを豊かにして行ってください。わたしたちが互いに、神様

の愛の中で一つにされていることを、今日の聖書の言葉から思い出していただければ、それも難しくはないと思います。

6月20日



萩 敦子 先生
(本学専攻科介護福祉専攻
助手・本学卒業生)

保育科2年の時、就職試験を受けるものの落ちてしまい、大学の編入試験を受けるものの、それにも失敗してしまい、途方に暮れていました。そんな卒業間近の頃、近所の人々の勧めで児童養護施設の面接に行き、何もわからないまま、やっと就職が決まりました。

4月、5月は、何をしていたのか覚えていないくらい毎日が必死でした。施設には満3歳から18歳までの約20人の子どもたちが生活していました。朝、小・中・高それぞれの学校に送り出した後、大量の洗濯をし、幼児さんのお世話に追われ、午後、やっと一息つけるかな、と思っていると「ただいま～」と低学年の子たちが帰ってきます。あっという間に夕食になり、幼児さんをお風呂に入れ、寝かしつけながら自分も寝てしまう、そんな毎日の繰り返しでした。

そんなある日、私はあることを思うようになりました。それは、就職してから一度も折り紙を折ったり、紙芝居をしたり、保育士らしいことをしていない。まるで、お母さんみたいに働いているだけじゃないか。そして、それがなぜかということに気がきました。それは、私が今、目の前にしている子どもたちに必要なのは、折り紙でも紙芝居でもなく、今日食べる物があるということ、洗濯された清潔な服が着られるということ、泣いた時、抱きしめてくれる人がいるということだったのです。

子どもたちの入所理由は様々でした。生まれて間もなく置き去りにされた子、両親から虐待を受けた子、それによって身体にしょう

がいのある子、不登校の子など、どの子ども私には想像もできないような状況の中、毎日をけな気に生きていました。そのことに気がついてから、私は、仕事が終わって車に乗ったとたん涙があふれ、まず泣いてから家に帰るようになりました。そして、自分の未熟さと無力さを嫌というほど感じ、自信を失くしていました。

そんなある日、私に忘れられない出来事がありました。ある4歳の男の子は、両親の虐待が理由で、2歳の妹と二人で入所していました。他の子と違って添い寝をされることを嫌がり、いつもひとりつぶつぶ何か言いながら、寝ていました。その夜、隣で妹を寝かしつけていると、いつものように何か言っています。よく聞いてみると「ぼくは、あつこ先生がすきなんだもん。」と、何度も繰り返していました。私は、どうしてこんな可愛い子が眠る時、お父さん、お母さん大好きと言えないのだろうと、悔しさで一杯になりました。

それから、私の保育に対する考えが少しずつ変わり「泣く暇があったら、もっと勉強しよう。」と思うようになりました。そして、再度、本学の介護専攻科に入学し、介護福祉について学び、卒業後は高齢者介護の仕事に就きました。

こうしてふり返ってみると、その時々で挫折があり、悩んだり、落ち込んだりしたけれど、いつもその時に会うひとや言葉、感じることを大切にしてきたから、今ここへ導かれているのだと思います。こうして私がここにいられるのは、私だけのちからではありません。だからこそ、今、私にできることを精一杯したいと思っています。

保育という仕事に就いて、未来ある子どもたちの出発点に携わることができました。介護という仕事に就いて、人生の最期の時間を共に過ごすことができました。どちらも素晴らしい職業だと思います。そんな保育や介護を学ぶ皆さんから私も学び、それを少しでもお返しすることが、今の私の仕事だと思っています。

チャペルを10倍「楽しむ」法 (その3)

今回は、チャペルのさまざまな「備品」についてご紹介します。

祭壇



これは、聖餐式（ミサ）に使用される祭壇です。大学礼拝ではほとんど使用されることがありませんが、聖餐式において「主の食卓」として用いられる、とても大切なものです。

もともとは、奥にある石造りの祭壇（ハイ・オルター）のみが設けられていましたが、近年礼拝の形式が見直され、「皆が同じ方を向いて礼拝する」ことよりも「共に食卓を囲む」というモチーフが強調されるようになったことから、手前にある木製の祭壇が新しく作られました。

ちなみに、石造りの祭壇はロビンソン司祭夫妻の記念として、聖堂落成時に娘さんが寄贈されたものです。



洗礼盤

「これ、どこにあるのかな？」と思った人もいるでしょうか？これは、聖堂の入口脇に設置されている洗礼盤です。文字通り、洗礼に使用されるものです。

「聖堂とは祭壇と洗礼盤を壁で囲ったもの」と言った人がいるくらい、これら二つはキリスト教礼拝において大切なものです。その大きな理由は、洗礼と

聖餐の二つが主イエス・キリストご自身が制定された聖奠（秘跡、 sacrament）であるからです。プロテスタント・カトリックの別によらず、ほとんどのキリスト教教派で、この2つの儀式は特別に重要なものとして位置づけられています。

洗礼という儀式は、教会という共同体への加入のための儀式であるということができません。洗礼盤が入口に設置されているのは、この教会のメンバーすべてが、洗礼というところを通してここに入ってきたことを忘れないようにという意味が込められていると言われます。「初心忘るべからず」ということでしょうかね。

この洗礼盤は、中部教区や柳城の母体となったカナダ聖公会の、ナイヤガラ教区の婦人会や日曜学校からの贈り物です。

次は、この教会にしかない大切な備品です。

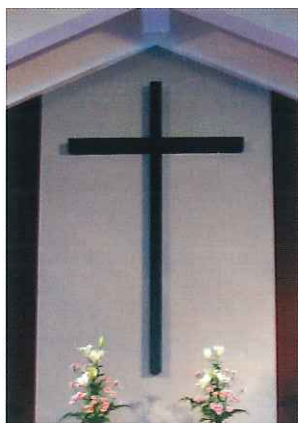
主教座

これは、教区主教が座するための特別な椅子で、「主教座」と言われます。この連載の1回目にも述べたとおり、チャペルは日本聖公会中部教区の「主教座聖堂」という特別な存在です。この名前は、読んで字の如くで、「主教座」が置かれている「聖堂」であることに由来します。



主教座は単なる椅子ではありません。主教とは、キリストが始められた教会をわたしたちが歴史の中でずっと受け継いできたということの象徴的存在であり、また「今、この場所にある教会」という地方性（ローカル）と、「世界に広がる教会」という全体性（グローバル）との接点であるとも言えます。この椅子は、それを象徴するものです。

この主教座は、初代教区主教であるハミルトン師の娘さんが寄贈されたものです。



十字架

聖堂に入ったときに最初に目に入るであろうシンボル、正面壁面の十字架です。近年建てられた他の教会では、祭壇に視点が集中するようにという意図で十字架を中心からずらしたり、大きさを小型にしたりなども見られますが、この聖堂は十字架が目立つようにデザインされています。

この十字架は、聖堂建築当時の名古屋聖マタイ教会の教会委員の方々が寄贈されました。

オルガン



儀式に直接関わる部分ではありませんが、やはり礼拝で重要な役割を果たす備品です。教会とい

えばオルガン、それもパイプオルガンということになりますが、この聖堂には米国・アレン社製の電子式のオルガンが設置されています。電子式とはいえ、ストップ数や鍵盤数など、機能的には中規模のパイプオルガンに匹敵するものです。(こんなオルガンを演奏するチャンスが学生に与えられているというのは、実はけっこうすごいことなんですよ！)

さて、以下は細かい備品になりますが、柳城にとってもゆかりのあるものです。

祈祷書台



燭台

(ろうそく立て)

祈祷書台は普段の礼拝でほとんど見かけませんし、ハイ・オルターで用いる6本の燭台も使用する季節が限られているため、あまりなじみ



がないかもしれません。実は、これらは本学初代学長のホーキンス先生が寄贈されたものです。先生の奥ゆかしさを反映してか、お名前を刻むというようなことはなされていませんが、柳城に現在学ぶ方々には、ぜひこのことを心のどこかに留めておいていただきたいと思います。

最後にご紹介したいのは、礼拝の行列に使用する品です。

バナーと行列用十字架



この2つの品は、礼拝の際に行列の先頭を導いたり、様々な人が礼拝に加わっていることを示すためにその所属を表示したりというような役割があります。バナーについては柳城の礼拝では用いていませんが、十字架のほうは入学式や卒業式など大きな礼拝の際に用いています。

このバナーは、1987年に行われた日本聖公会組織成立百年記念大礼拝で使用されたもので、それ以来教区礼拝などで用いてきましたが、さすがにくたびれてきた感があります。新しいバナーをあつらえる時期かもしれません。ついでに、柳城のバナーもぜひ欲しいですね！

新任教職員自己紹介

チャペルは、本学に連なるすべての人が集まる場所です。その意味で、この春から本学にやってこられたお三方に、自己紹介をお願いしました。



野崎 真琴 助教

もうすでに多くの方がご存知の通り、私はかなりの「天然ボケ」キャラです。本人は到って真面目なつもりですが(?)、昔からよく「おもしろい」「変っている」と言われていました。経済学部出身であるにもかかわらず、保育に携わるようになったことも不思議です。ただ元々「人間好き」なので、今この仕事に就けていることはかなり幸運なことだと思っています。これから頑張っていきますので宜しくお願い致します。



山田 則之 教務課長

私は岐阜市の高校を卒業し、名古屋で就職しました。当時の市街の道路は砂利道が多く、市営電車も走っておりまして。街路樹はまだまだ小さくかわいた街の印象が強かったものです。当時から、野球をラジオ放送で聞くのが楽しみで、それは今でも続いています。インターネットで試合の経過・結果が随時入手できるとは、思いもよませんでした。電話回線でパソコン通信を始め、今では光通信でもって世界の情報を見るのが楽しみです。



齊藤 政義 就職課長

縁あってこの4月から、本学就職課長としてお世話になることになりました。少子化・高齢化に拍車がかかっている現代、優秀な保

育者・介護福祉士の必要性がますます高まっています。過去37年間、義務教育に携わってきた経験も生かし、一人でも多くの優れた人材を社会に送り出せるよう頑張りたいと思います。

似顔絵は保育科2年 小野田梨沙さんの作品です。

お知らせ

▼昨年来工事を行っていたチャペルは、すべての作業を終えました。また、チャペル裏には新たに4階建ての「中部教区センター」が完成しました。これから、柳城生向けにもさまざまなプログラムが企画される予定ですので、ご期待ください!

▼今号でご紹介したお二方の他、前期礼拝では以下の方々に講話をいただきました。

4/25: 大西修司祭 (名古屋聖マタイ教会 牧師)

7/4: 鈴木はる美先生 (附属豊田幼稚園 園長)

7/11: 尾上明子先生 (本学教授)

▼7月18日には合同礼拝が予定されています。この様子については次号でご紹介する予定です。

▼8月22日から31日まで、チャプレンの引率で5名の柳城生が、中部教区の姉妹教区であるフィリピン聖公会北中央教区を訪問します。旅路の安全と無事をお祈りください。



2007年7月20日発行 第13号

発行所 名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼
発行者 名古屋柳城短期大学 宗教委員会

印刷所 株式会社 丸和印刷



この印刷物は再生紙を使用しています。